

に割かれている。国や藩ごとに従来の研究・調査の進展状況が異なるためであろうが、解説にかなりの精粗があるものの、台場ごとの平面図や藩ごとの一覧表も豊富に収載されており、編者が「はしがき」に記す「幕末・明治維新時の築城実態の解明」や「従来の城郭研究の視座の再検討」に大いなる示唆を与えてくれる。

城下町・陣屋町をはじめとする囲郭都市ないし囲郭集落を調査する中で西洋式星型囲郭の特異性とそのルーツを探索しつつある評者にとって、本書のような内容の事典が刊行されたことは大いに有難い。しかし、本書は上述の紹介文に記すように、歴史地理学界の関係方面の研究者にとっても有用と信ずるので、一冊備えられるよう推賞させていただき次第である。(戸祭由美夫)

#### 注

- 1) 城郭というよりも城下町に重点を置いたものとして、シリーズものでは『太陽コレクション・城下町古地図散歩』全9冊(平凡社, 1995-98)が、一冊ものでは『日本の名城 城絵図を読む』(別冊歴史読本91, 新人物往来社, 1998)が代表的といえよう。

### 武内和彦・鷺谷いづみ・恒川篤史編

#### 『里山の環境学』

東京大学出版会 2001年11月

A5判 257頁 2,800円

近年、日本の各地で里山の保全が注目されている。評者は霞ヶ浦の水質改善に関わる市民活動に参加しているが、その活動においても里山の保全が関心事となっている。高度経済成長期を通して、湖岸の人工化や流域の都市化などによる環境変化の結果、霞ヶ浦でも著しい水質汚濁が見られた。水質浄化を推進するためには、湖沼流域の環境保全が重要な課題とされ、当該市民団体では里山の水質浄化機能にも注目し、生物多様性の維持とともにその保全を提言している。

里山の保全が語られる場合、里山の定義と性質が重要になる。本書では「人里近くに存在する二次林や二次草地」を里山として限定しており、「その周囲にある農地、集落、水辺などをあわせた二次的自然地域」を里地としている。里山の多くは二次林として丘陵地や台地に見られ、谷津田などの里地とともに人間とのかかわりを通して維

持されてきた。燃料革命などにより里山の重要な機能が失われ、里山の管理が長期間にわたってなされていない場合が多い。今日、里山の面積は宅地開発などによって減少しており、里地でも二次的自然としての農村的機能が崩壊しつつある。本書は、里山の持続性が二次的自然である里地の維持によって保障されるという観点から、里地維持の重要性を評価するとともに、生物資源に依拠した循環型社会の再構築を提言している。

本書の構成は、以下の通りである。

第1章 里山の自然をどうとらえるか

第2章 里山の変遷と現状

第3章 生物多様性の宝庫としての里山

第4章 里山を守る新しい試み

第5章 生物資源としての里山の可能性

第6章 里地自然を保全するための長期的戦略

本書の執筆は、東京大学大学院農学生命科学研究科の3人の編者を含む専門が異なる16人によってなされ、(財)日本生命財団の特別研究助成による研究課題「“里地保全戦略”の構築——総合的・計画的な里地の保全をめざして」の研究成果としてまとめられている。各章が独立した研究内容である傾向がみられ、節ごとに執筆分担がなされている。

第1章においては、第1節で里山と里地の定義とそのとらえ方を、丘陵地や台地の里山と谷津田の景観から示し、第2節で保全生態学の視点から、石器時代以来の里山における植生管理の変遷を、生物多様性との関係から述べる。第3節で市民運動による里山の保全・管理の実際と意義を述べ、第4節で環境行政による里地自然への政策が述べられ、本書全体の方向性が示されている。

第2章では、第1節で「全国スケールでみた土地利用の変遷」が述べられ、「日本における里山面積の推定」がなされている。「地区スケールで見た里山の変化」として、多摩丘陵南部の荏田近辺における土地利用の変化から丘陵地型里山の変遷と新田開発以降に武蔵野台地に残存する台地型里山の変遷とが比較されている。第2節では、明治初期の迅速測図等から里山の面的変化を把握し、多摩丘陵鶴見川流域が樹林地の面積を減少させつつクヌギ・コナラ林へ変遷していく要因を述べる。第3節として、京都盆地のアカマツ林が野生ツツジの里山に変遷していることから、照葉樹

林化の過程を述べている。第4節として埼玉県比企丘陵地域の里山の変容事例を、中世の入会採草地から戦後のニュータウンやゴルフ場開発に至る変遷から述べ、とりわけ戦後の変化を空中写真と土地利用図で示している。

第3章は第1節で里山の生物多様性を高める事例として、植生管理が鳥類の生息地を変化させることを述べる。第2節では、昆虫や鳥によって里山が育成されることが述べられる。第3節で洪積層と大阪層群からなる信太山丘陵において、大規模な宅地開発から取り残された自衛隊演習地の自然が、湧水湿地として生物多様性を維持しているとする。第4節では、手賀沼・印旛沼水系の圃場整備前の谷津田と斜面林における組み合わせが、カエルの生息と捕食者であるサシバの生態との関係で紹介されている。

第4章の第1節は、里山保全の市民活動の背景と活動の事例、イベント・組織の紹介である。第2節では、多摩ニュータウンの桜ヶ丘公園における「こならの丘」のボランティア活動による管理の事例が紹介されている。第3節は図師・小野道を事例に、町田市の神明谷戸の歴史的環境保全地域指定に対する地域住民の対応を記している。第4節では、「湖と流域の環境保全のための協働」として霞ヶ浦のアサザプロジェクトの事例が取り上げられ、アサザを生育させるための粗朶供給をする粗朶組合により、流域の里山管理がなされることが述べられている。

第5章では第1節で民話に記された里山の伝統的な利用法が紹介され、木材資源としての里山の持続的な生物生産力が述べられる。第2節では里山を再生可能なエネルギーとして再評価している。第3節では、環境教育の場として里山の保全活動を位置付け、市民参加の事例として薪材でつくるバウムクーヘンづくりの事例を述べている。

第6章では里山の量的・質的な管理・保全と里山の面的保全が取り上げられる。第1節では日本における森林を時系列的に概観した上で、管理の実態と可能性として林家、市民ボランティア、公園の管理を取り上げる。さらに、管理の結果得られるバイオマスとしてのエネルギー利用の可能性も位置付けている。第2節では、里地の自然を保全するための法整備として土地利用調整システムを述べた上で、自治体の取り組みとして高知市をはじめとする4市の条例を取り上げ、制度化と運

用に伴う課題を示している。第3節では、国土計画における里地保全の位置付けとともに、あらゆる主体の参加による里地管理の可能性が述べられている。

本書は里山と里地を人間の手によって管理された二次的自然と定義することで、野生動物と人間の共存の場として里山の二次林、谷津田や水辺などの里地の自然を市民参加や公的な支援によって保全・管理することを、既存の事例と政策提言によって示している。丘陵地や台地に見られる里山は、クヌギ、コナラなどの二次林として里地とともに農家の営みによって管理・維持されてきた。薪炭材や堆肥材料を供給してきた里山の多くは、1950年代以降の燃料革命や化学肥料の普及により、農家の生活の場として機能を果たさなくなった。1960年代以降、丘陵地や台地の宅地開発等による地形改変や土地改変の結果、里山は空間的にその面積を減少させてきた。本書において、残存する里山と里地の二次的自然を、農家に代わって都市住民が管理することは、自然自体の持続性ととともにその活動へ参加する者の人間性の回復に繋がっていることが指摘されている。

本書は里山自体の生態環境に関する多くの情報を提供しているが、地理学の研究書ではないため、里地との繋がりから見た地域特性に十分言及されていない点が惜まれる。本書が取り上げる里山と里地の自然は、大都市近郊の丘陵地と台地の事例である。1960年代以降、丘陵地ではニュータウン開発に伴う大規模な地形改変、台地の段丘面では宅地や工場への広域な土地改変により、人工地形の面積が著しく増加した。その結果、残存する里山の地形上の位置や面積、里地の都市化の状況にも地域差が見られ、保全や管理のされ方も多様化している。一例として、本書も事例としている多摩丘陵においても、ニュータウン開発の地域差により地形改変の状況が異なり、宅地開発を優先に切土・盛土がされた地区と里山との共存を配慮して切土・盛土がされた地区とでは、里山や谷津田を含む土地利用の状況とともに里山のもつ意義と管理の状況が異なる。本書を地理学研究者の視点で精読した場合、丘陵地と台地における里山と里地の変遷を研究していくための基礎的な情報と、残存する里山の今後の保全・管理に関する指針を得ることが可能であり、一読をお奨めする次第である。(竹内憲一)